

指導資料

社会 第129号



鹿児島県総合教育センター

平成29年10月発行

対象

中学校 義務教育学校

校種

特別支援学校

知識の理解の質を高める中学校社会科授業改善

新学習指導要領改訂のポイントである知識の理解の質を高めるとはどのようなことか、そして、知識の理解の質を高めるために、社会的な見方・考え方を働かせた新たな視点の問いを組み込んだ中学校社会科の授業改善について、具体的な事例を通して紹介する。

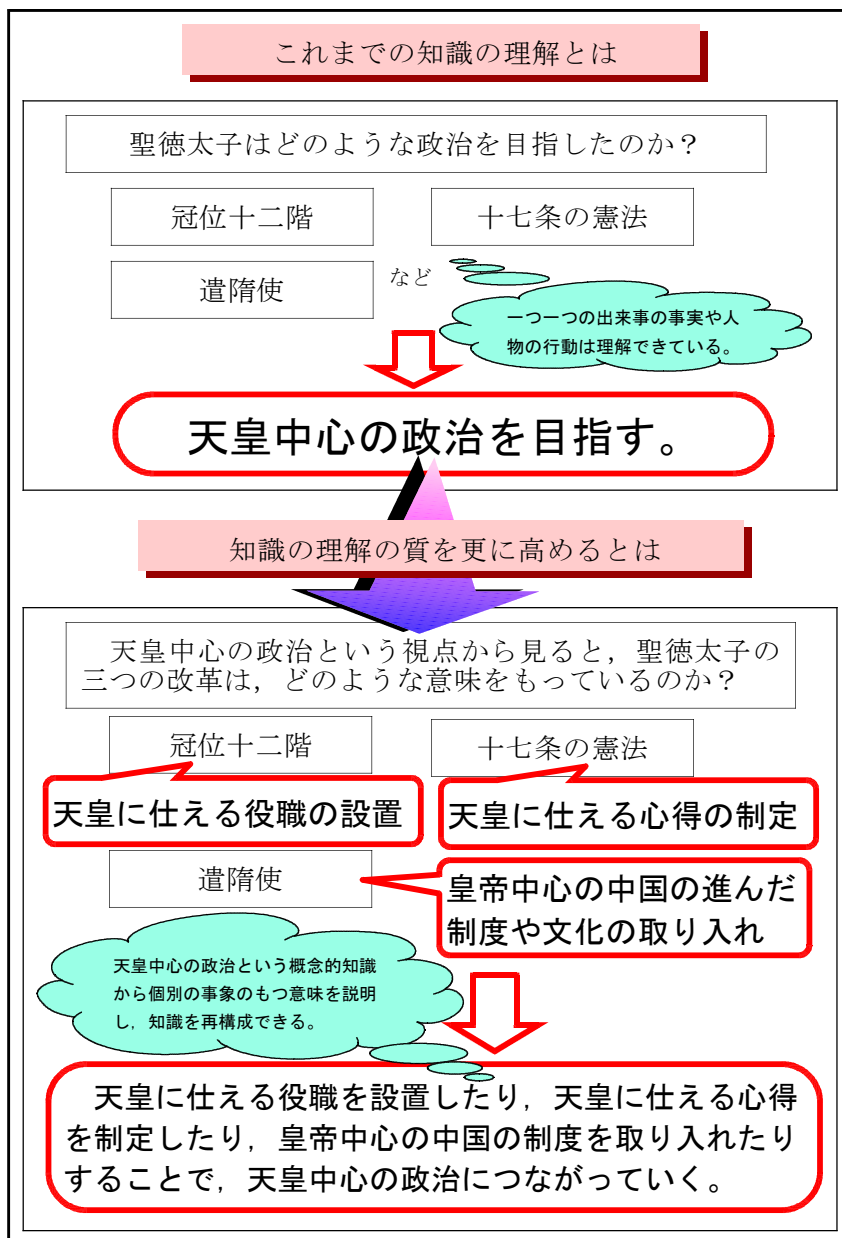
1 知識の理解の質を高めるとは

【資料1】知識の理解の質を高めるとは

社会科において、新学習指導要領改訂のポイントである知識の理解の質を高めることを、本稿では以下のように捉えた。

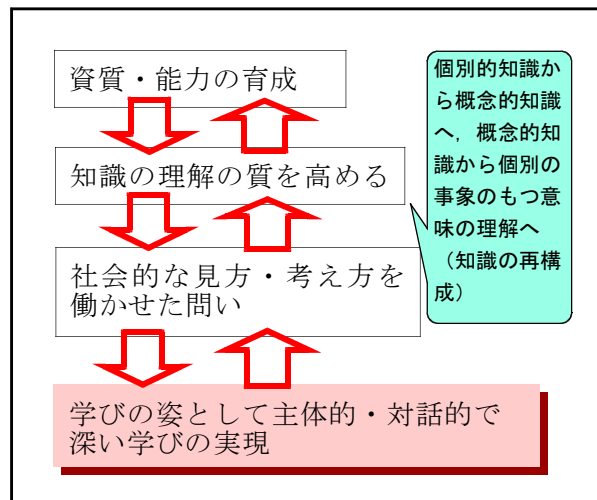
事実に関わる個別的知識だけでなく、概念的知識まで理解できること、そして、概念的知識から個別の事象のもつ意味を説明し、知識を再構成できること

知識の理解の質を高めるためには、資料1のように、個別の事実の理解とその事実がもつ意味の理解を結び付けることが必要である。この結び付きを考えさせる起点となるのが、問いである。そこで、知識の理解の質を高めるために、社会的な見方・考え方を働かせた新たな視点の問いを組み込むことを提案する。



資料2は、知識の理解の質が高まるイメージを一般化したものである。知識の理解の質を高めるためには、社会的な見方・考え方を働かせた問いを検討することが大切であり、主体的・対話的で深い学びの実現は、問いの質が大きく関わってくる。

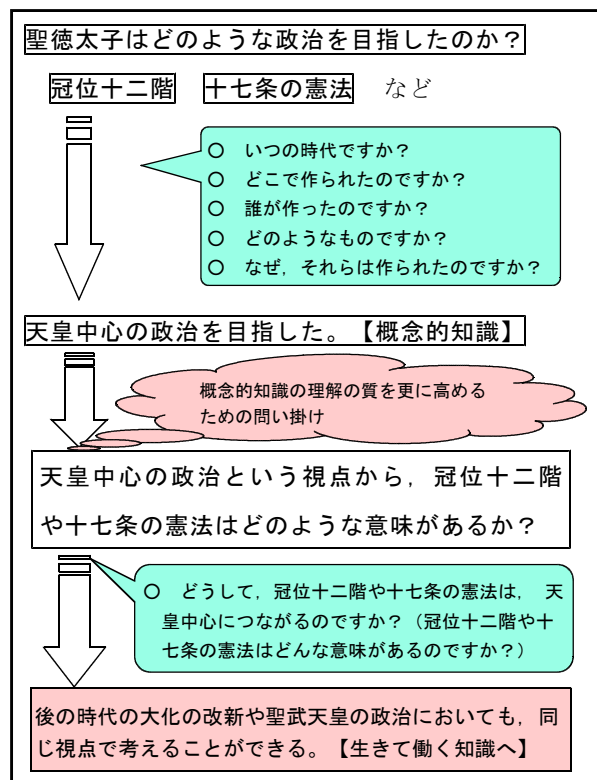
【資料2】知識の理解の質が高まるイメージ



2 知識の理解の質を高める問いとは

資料3は、「聖徳太子の政治改革」の学習における問いの例である。学習の過程で、生徒は、天皇中心の政治を目指すために、冠位

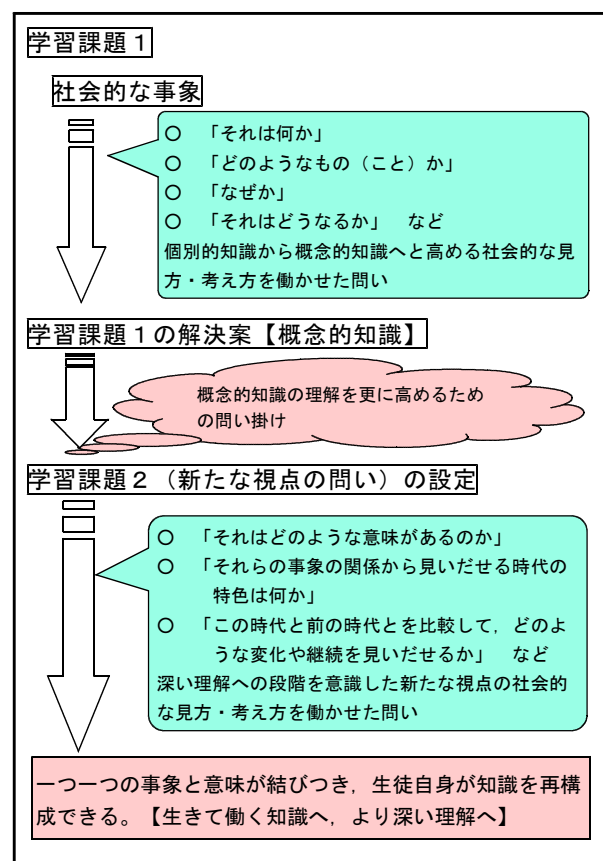
【資料3】「聖徳太子の政治改革」における問い



十二階や十七条の憲法が作られたことを理解する。その上で生徒が、「どうして、それらが天皇中心の政治につながると言えるのか？」を既習の知識と関連付け、説明することによって、習得した知識の理解の質を更に高めることができる。つまり、そこにつながる新たな視点の問いが重要となってくる。

資料4は、知識の理解の質を高める問いを一般化したものである。“何年にこうした出来事が起きた”という歴史上の個別的知識が、“なぜその出来事が起こったのか”，“その出来事がどのような影響を及ぼしたのか”などを追究する学習過程を通じて、当時の社会や現代にもつ意味なども含め、知識相互がつながり関連付けられながら、生きて働く知識として理解が深まっていく。

【資料4】知識の理解の質を高める問い



次項では、知識の理解の質を高めていく新たな問いを立てる視点について、歴史的分野の授業実践を基に、具体的に考察していきたい。

3 中学校社会科歴史的分野「日本列島の誕生と大陸との交流」の授業実践例

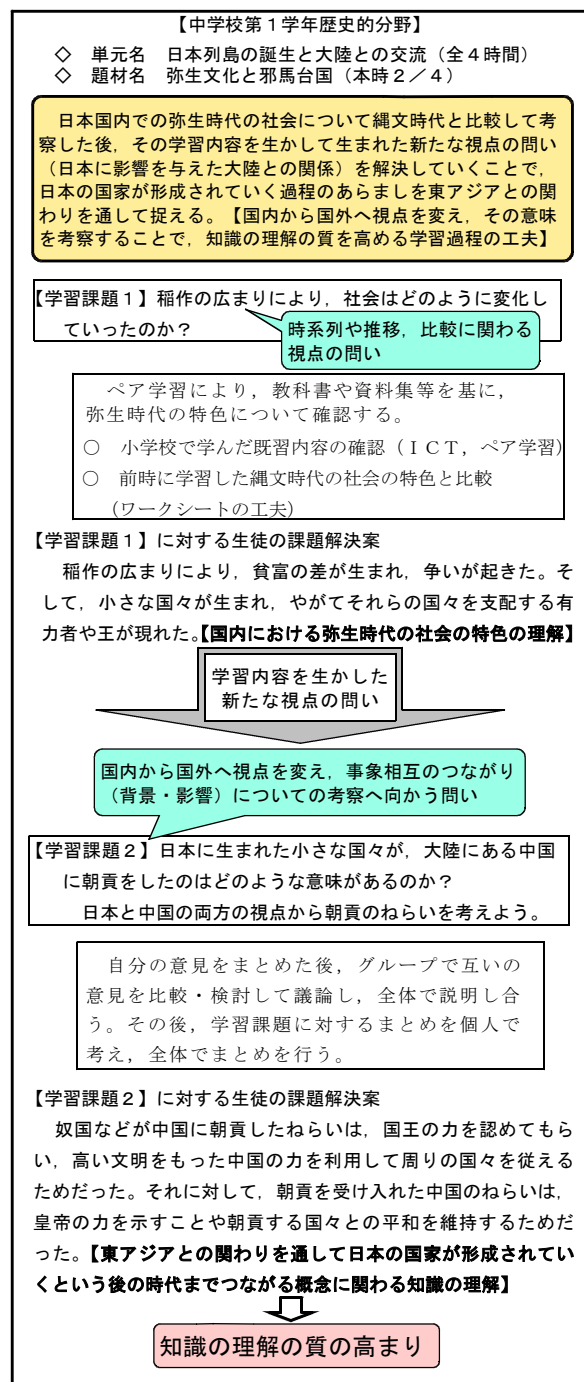
【中学校第1学年歴史的分野】				
◇ 単元名 日本列島の誕生と大陸との交流（全4時間）				
◇ 題材名 弥生文化と邪馬台国（本時2／4）				
◇ 学習目標				
○ 弥生時代の人々の生活の様子を、考古学の成果を活用しながら具体的に理解する。				
○ 日本の国家が形成されていく過程のあらましを、東アジアとの関わりを通して捉えながら、適切に表現できる。				
◇ 本時の展開				
過程	時間	形態	学習活動	指導上の留意点
導入	5分	一斉	1 資料を基に、本時の学習課題を設定する。	・ ICTを活用して資料を提示することで、学習課題への追究意欲を高める。
			【学習課題1】稲作の広まりにより、社会はどのように変化していったのだろうか。	○ ICTを活用して、前時の既習内容と比較し、疑問をもたせる。 【学習課題1】として、日本国内での弥生時代の人々の様子について、縄文時代と比較して考察する問いを立てている。
展開	5分	個・ペア	2 弥生時代の特色について確認する。	・ 教科書や資料を基に、弥生時代の特色について確認する。 ・ 蓄えの差から国が生まれ、国同士の争いが起きたことを理解できるようにする。
	5分	個	稲作の広まりにより、貧富の差が生まれ、争いが起きた。そして、小さな国々が生まれ、やがてそれらの国々を支配する有力者や王が現れた。	○ 前時の縄文時代と比較したワークシートを活用する。 ○ 小学校での既習内容や前時の学習をペアで確認し、本時の課題解決を図る。 【学習課題1】を追究し、その解決策を出している。
	15分	グループ	3 日本と中国との関係を、朝貢を基に考察する。	・ 資料から新たな疑問に気付くようにする。
	10分	グループ	【学習課題2】日本に生まれた小さな国々が、大陸にある中国に朝貢をしたのはどのような意味があるのだろうか。	中国の三つの考古学的資料に共通して出てくる文字「朝貢」から、生徒はこの頃日本と中国が交流していることに気付く。 提示した資料から生徒が疑問をもち、【学習課題2】として、日本国内から国外へと視点を変え、日本に影響を与えた大陸との関係について解決していく問いを立てている。
終末	10分	個・一斉	4 グループごとに発表する。	・ 既習事項や新たな資料を活用して、日本に生まれた小国が大国である中国に朝貢した意味を考えられるようにする。 ・ 日本と中国の両方の視点で朝貢のねらいを考察できるようにする。
			5 学習課題に対するまとめを行う。	○ 日本で振り返らせ、主体的な学びを促す。 日本の国家が形成されていく過程のあらましを、東アジアとの関わりを通して捉えることができた。また、日本の制度や文化などが東アジアからの影響を受けていくことの理解にもつながっていくことができる。

※ 鹿児島市立吉田南中学校 久保長太郎教諭の実践を基に作成

本実践は、弥生時代の日本国内の歴史的事象に関わる個別的な知識からその時代の特色などの概念的知識を理解した上で、新たな視点の問いによって、日本の国家が東アジアとの関わりを通して形成されていく意味を理解し、さらに、後の時代までつながる概念に関わる知識へと理解の質を高めようとしたものである【資料5】。

この時間のポイントは、国内から国外へ視点を変え、事象相互のつながり（背景・影響）といった社会的な見方・考え方を働

【資料5】新たな視点の問いを設定した授業展開



かせた問い「日本に生まれた小さな国々が、大陸にある中国に朝貢をしたのはどのような意味があるのか？」を学習課題2として設定したことである。

【資料6】社会的な見方・考え方を働かせた問いの視点

考えられる視点例	
中学校地理的分野	○ 位置や分布に関わる視点 絶対的、相対的、規則性・傾向性、地域差など
	○ 場所に関わる視点 自然的、社会的など
	○ 人間と自然の相互関係に関わる視点 環境依存性、伝統的、変遷、保全など
	○ 空間的相互依存作用に関わる視点 関係性、相互性など
	○ 地域に関わる視点 一般的共通性、地方的特殊性など
中学校歴史的分野	○ 時系列に関わる視点 時期、年代など
	○ 諸事象の推移に関わる視点 展開、変化、継続など
	○ 諸事象の比較に関わる視点 類似、差異、特色など
	○ 事象相互のつながりに関わる視点 背景、原因、結果、影響など
中学校公民的分野	○ 現代社会を捉える視点 対立と合意、効率と公正、個人の尊重、自由、平等、選択、配分、法的安定性、多様性など
	○ 社会に見られる課題の解決を構想する視点 対立と合意、効率と公正、民主主義、自由・権利と責任・義務、財源の確保と配分、利便性と安全性、国際協調、持続可能性など

※ 中教審答申（平成28年12月21日）別添資料を基に作成

【資料6】を参考に、新たな視点の問いを学習過程に組み込むことで、知識の理解の質を更に高め、深い学びを実現させる授業改善につながっていくと考える。

ー引用・参考文献ー

- 文部科学省 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）』 平成28年
- 文部科学省 Web ページ『中学校学習指導要領解説社会編』 平成29年8月アクセス
(教科教育研修課 中熊 信仁)